

## 6章 学校の取組紹介

A 中学校・・・学習到達目標（CAN-DO リスト）に基づいて単元ごとに付けたい力を明確化し、活用することを通して高い英語力を育成する

B 中学校・・・少人数の習熟度別指導を取り入れ、授業内で英語をたくさん使う工夫を行い英語に対する前向きな気持ちを育む

C 中学校・・・スピーチやプレゼンテーションなど、「話す活動」を観点別に評価し、3年間通じて表現力を育成する

D 中学校・・・即興性の育成と技能統合型の言語活動を取り入れ、高次のスピーキング力とライティング力を養う

E 中学校・・・スピーキングの場面設定とライティングの徹底指導に加え小中連携を組織的に行う

F 中学校・・・技能統合型の言語活動と英語に触れる機会の増加により、4技能をバランスよく育成する

取組紹介① A 中学校

学習到達目標（CAN-DO リスト）に基づき、単元ごとに付けたい力を明確化し、活用中心の授業で高い英語力を育成する

◎学校プロフィール（※学級数及び生徒数は平成 28 年 10 月調査日時点）

設立・形態	昭和 60（1985）年設立
学級数・生徒数	12 学級（342 名）／第 3 学年…5 学級（118 人）（特別支援学級 2）
ALT 活用状況	非常勤 1 名。1 か月に 1 回程度、各クラスの授業に入る。
取組の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中高が連携して設定した学習到達目標（CAN-DO リスト）と、それを基にした年間指導計画</li> <li>・ペア・ワークやグループ・ワークを取り入れた技能統合型の授業</li> <li>・授業を実際のコミュニケーション場面にする取組</li> </ul>

◎試験結果、質問紙における学校の特徴

・第 3 学年の平均スコア（点）

	Reading	Listening	Writing	Speaking
A 中学校	98.9	113.6	42.6	10.0
全国平均	83.4 / 170	93.8 / 170	31.3 / 96	6.7 / 14

・生徒質問紙調査結果

No.12 次の学年の英語の授業では、英語を読んで、（一文一文ではなく全体的）概要や要点をとらえる活動をしてほしいですか。



No.13 次の学年の英語の授業では、聞いた内容をじっくり読んでほしいですか。



英語で問答したり、意見を述べ合ったりする活動の実施率が高い

4 技能すべてにおいて、全国平均を上回っている。どの技能もバランスよく高めていることから、技能統合的活動が充実していると推察される。

また、アンケートでは「英語を読むことに関する活動」について、「英語を読んで、概要や要点をとらえる活動をしていたか」という質問に対して「そう思う」と答えた生徒が 47.2%（全国平均は、39.4%）と全国平均を上回った。

さらに、「英語を話すことに関する活動」について、「聞いた内容をじっくり読んでほしいか」という質問に対して「そう思う」と答えた生徒が 63.0%（全国平均は、34.4%）と全国平均を大きく上回っている。

◎ 調査結果に寄与したと考えられる授業内の取組

1. 小中高が連携して設定した学習到達目標 (CAN-DO リスト) と、それを基にした年間指導計画

当校は、H26 より「英語教育強化拠点事業」研究校の指定を受け、同様に指定を受けている地域の2校の小学校と1校の高等学校とで連携し研究に取り組んでいる。研究では、児童生徒の各学習段階に応じた身に付けるべき英語力を、小・中・高等学校一貫した学習到達度目標 (CAN-DO リスト形式) で明確化し、英語を使用する必然性のある言語活動を中心とした授業を行う。その中で4技能をバランスよく育成すれば、英語運用能力が高まり、コミュニケーション能力も養えると考え、まずは、学習到達度目標 (図1) の策定を行った。この学習到達目標において、4技能の学習が開始される小学校5年から、高等学校3年次まで円滑な接続を意識し、系統立てて学んでいけるように目標を設定した。

図1 英語教育強化地域拠点事業【A地域】CAN-DO リスト

英語教育強化地域拠点事業【 A地域】CAN-DO リスト

校種	小学校			中学校			高等学校		
	1学年	2学年	3学年	1学年	2学年	3学年	1学年	2学年	3学年
聞く	1 ゆっくり(または繰り返し)はつきりと口頭語彙で話されれば、身近でなじみのある英語のプレゼンテーション等を聞いて、概要や要点を理解することができる。	2 ゆっくりはつきりと話されれば、身近でなじみのある英語や人物インタビュー等を聞いて、概要や要点を理解することができる。	3 ゆっくりはつきりと話されれば、身近でなじみのある英語や人物インタビュー等を聞いて、概要や要点を理解することができる。	4 はつきりなじみのある英語で話されれば、学習材として扱ったなじみのある英語に関するプレゼンテーション等を聞いて、概要や要点を理解することができる。	5 自然な速さの標準的な英語で話されれば、学習材として扱ったなじみのある英語に関する発表等を聞いて、概要や要点を理解することができる。	6 自然な速さの標準的な英語で話されれば、社会的な出来事や話題をテーマにした発表等を聞いて、概要や要点を理解することができる。	7 自然な速さの標準的な英語で話されれば、時事問題や社会的出来事に関する発表等を聞いて、概要や要点を理解することができる。		
話す	1 好きな音や消音など等の身近で日常の場面を用いて、質問したり答えたりすることができる。	2 好きな音や消音など等の身近で日常の場面を用いて、質問したり答えたりすることができる。	3 興味のあるものや関心のあること等の身近で日常的な質問や説明をする表現を用いて、対話を続けることができる。	4 関心や理由を述べたり、意見を述べたり、感想や考えを交流することができる。	5 人間・社会・自然等の話題について、絵やもの等を聞いて適切に質問を指示し、意見交換を行うことができる。	6 人間・社会・自然等の話題について、絵やもの等を聞いて適切に質問を指示し、意見交換を行うことができる。	7 動画や写真に取り上げられる様子の話題に関する相手との意見について、まとまりのある文章を用いて、意見交換を行うことができる。		
読む	1 前もって用意された内容であれば、自分や自分の学校のこと等身近でなじみのある英語について、プレゼンテーション等を行うことができる。	2 前もって準備した上で、自分のお気に入りのもの等の身近でなじみのある英語について、簡単な質問や文を用いて、概要や要点を理解することができる。	3 前もって準備した上で、読んだことや興味のあること等の身近な話題について、簡単な質問や文を用いて、概要や要点を理解することができる。	4 前もって準備した上で、関心や理由を述べたり、意見を述べたり、感想や考えを交流することができる。	5 前もって準備した上で、関心や理由を述べたり、意見を述べたり、感想や考えを交流することができる。	6 前もって準備した上で、関心や理由を述べたり、意見を述べたり、感想や考えを交流することができる。	7 前もって準備した上で、関心や理由を述べたり、意見を述べたり、感想や考えを交流することができる。		
書く	1 必要に応じて辞書を使い、自分や自分の学校のこと等身近でなじみのある英語について、簡単な質問や文を用いて、概要や要点を理解することができる。	2 必要に応じて辞書を使い、読んだことや興味のあること等の身近な話題について、簡単な質問や文を用いて、概要や要点を理解することができる。	3 必要に応じて辞書を使い、読んだことや興味のあること等の身近な話題について、簡単な質問や文を用いて、概要や要点を理解することができる。	4 必要となる語句を調べたりすれば、人物、場所、文化や日常生活等について書かれた紹介文を読んだり、概要や要点を理解することができる。	5 必要となる語句を調べたりすれば、学習材として扱ったなじみのある英語に関する文章を読んだり、必要に応じて辞書を使い、概要や要点を理解したりすることができる。	6 必要となる語句を調べたりすれば、社会的な出来事や話題について書かれた記事を読んだり、必要に応じて辞書を使い、概要や要点を理解したりすることができる。	7 必要となる語句を調べたりすれば、時事問題や社会的出来事に関する記事を読んだり、必要に応じて辞書を使い、概要や要点を理解したりすることができる。		
話す	1 簡単な質問や文を用いれば、自分のお気に入りのもの等の身近で日常の場面を用いて、質問したり答えたりすることができる。	2 簡単な質問や文を用いれば、興味のあるものや関心のあること等の身近で日常的な質問や説明をする表現を用いて、対話を続けることができる。	3 関心や理由を述べたり、意見を述べたり、感想や考えを交流することができる。	4 関心や理由を述べたり、意見を述べたり、感想や考えを交流することができる。	5 人間・社会・自然等の話題について、絵やもの等を聞いて適切に質問を指示し、意見交換を行うことができる。	6 人間・社会・自然等の話題について、絵やもの等を聞いて適切に質問を指示し、意見交換を行うことができる。	7 動画や写真に取り上げられる様子の話題に関する相手との意見について、まとまりのある文章を用いて、意見交換を行うことができる。		

小・中・高の系統性のある学習到達目標に関連付け作成された「年間指導計画」(図2)には、設定した目標を、年間指導計画の各単元においてどう位置づけ、どう指導し、その目標の達成を見取るためにどのような評価を行うかをまとめた。

図2 年間指導計画 (例: 1年次)





さらに、これらの言語活動を通し、やり取りに必要なスキルの指導も行っている。指導事項については、1年次基本的なストラテジーから始まり、ペアでのやり取りにおけるスキル、グループでのやり取りのスキルへと段階的に高度なスキルを指導する。3年次においては高校でのディスカッションとの接続を意識し、感想や考えを交流するためのスキルを指導する。

これらの指導事項を生徒の発達段階に応じて相互の関連性を検討しまとめられたものが「指導内容系統表」(図3)である。

例えば、1年次では「好きなものや得意なこと等の身近でなじみのある話題について、基礎的な表現を用いて、質問したり答えたりすることができる」という学習到達目標に沿い、「大切なものについて伝え合おう」という言語活動を設けている。ペアで話題について自由に対話をさせるが、「指導内容系統表」に基づき、聞いたことを基にさらに掘り下げて質問したり、理由を加えて述べたりするなど、コミュニケーションをより深められるスキルを指導する。2年次では更に、相手に提案や助言をしたり、具体的に説明したりするスキルを指導する。その後3年次では、まとまりのある英文を読み、読んだことをもとに考えや気持ちを述べ合うため、引用の仕方や意見をつないで話すスキルを指導する。

それぞれの言語活動を通じて身に付けた力を組み合わせ、さらに活動を発展させ、やり取りの活動を行った後、レポートにまとめて発表する等、ライティング力の育成にもつなげている。

このように「話すこと」「聞くこと」の技能を中心とし、「読むこと」「書くこと」の技能を「話すこと」の技能と統合し言語活動を仕組んでいる。

加えて、生徒は毎単元・毎時間、授業の最後に振り返りシート「Self Evaluation Sheet」(図4)を記入する。生徒自身が単元ごとの目標と毎時間の目標、それらに対する振り返りを行うことで見通しを持って授業に臨み、自身の達成状況を確認しながら主体的に学習に取り組んでいる。また、「以前の単元のシートを振り返ることで、自分の成長を実感できる」という生徒の声も出ている。



◎ 授業以外の取組

読むことへの興味を引き出す、英語蔵書の充実

教科書教材のみに留まらず、英語を読む機会を増やしていきたいというねらいから、英語の絵本を充実させている。廊下に英書スペースを設け、生徒が気軽に手に取れるようにしている。また、教室にも数冊英語の絵本を置いている。

同校では朝読書の時間を 10 分間設けており、その時間を利用して英書をここから選び、読んでいる生徒もいる。日常生活の中で英書に触れる機会がほとんどない生徒たちにとっては新鮮な機会となり、まずは、読みやすい絵本から手にとってみようというそのきっかけ作りとなっている。既に内容を知っている絵本を選び、日本語の表現と英語の表現の違いを楽しむ生徒や、知らないストーリーを推察しながら読みすすめる生徒など様々である。

写真 1 英語蔵書コーナー



## 少人数の習熟度別指導を取り入れ、授業内で英語をたくさん使う工夫を行い英語に対する前向きな気持ちを育む

### ◎学校プロフィール（※学級数及び生徒数は平成 28 年 10 月調査日時点）

設立・形態	昭和 22（1947）年設立
学級数・生徒数	15 学級（463 名）／第 3 学年…4 学級（154 人）
ALT 活用状況	非常勤 1 名。3 週間に 1 回程度、各クラスの授業に入る。
取組の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テンポのある言語活動と ICT を活用した学習指導で効果的に 4 技能を高める</li> <li>・習熟度別指導と評価のフィードバックで、生徒の意欲を高める</li> <li>・他教科での指導におけるアクティブ・ラーニングの視点を英語の授業に応用する</li> </ul>

### ◎試験結果、質問紙における学校の特徴

#### ・第 3 学年の平均スコア（点）

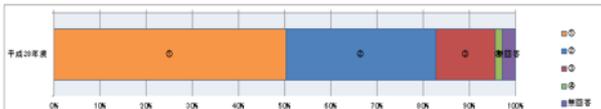
	Reading	Listening	Writing	Speaking
B 中学校	86.3	97.4	36.1	5.8
全国平均	83.4 / 170	93.8 / 170	31.3 / 96	6.7 / 14

#### ・生徒質問用紙結果

No.11 次の学年の英語の授業では、英語を聞いて、  
（一文一文ではなく全体の）概要や要点をとらえる活動をしていましたか。

◎「そう思う」 ○「どちらかといえば、そう思う」 ○「どちらかといえば、そう思わない」 ○「そう思わない」

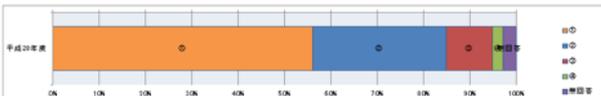
英検年度	選択番号	①	②	③	④	無回答	計
平成28年度	回答数	79	45	18	2	4	148
	選択率	50.4%	32.4%	12.8%	1.4%	2.8%	100%



No.12 次の学年の英語の授業では、英語を読んで、  
（一文一文ではなく全体の）概要や要点をとらえる活動をしていましたか。

◎「そう思う」 ○「どちらかといえば、そう思う」 ○「どちらかといえば、そう思わない」 ○「そう思わない」

英検年度	選択番号	①	②	③	④	無回答	計
平成28年度	回答数	78	40	14	3	4	139
	選択率	56.1%	29.8%	10.1%	2.2%	2.8%	100%



### 聞く・読むの活動を充実させ、 要点把握の力を高める

「英語を聞くことに関する活動」について、「英語を聞いて、概要や要点をとらえる活動をしていましたか」という質問に対して「そう思う」と答えた生徒が 50.4%（全国平均は、33.3%）と全国平均を大きく上回った。

また、「英語を読むことに関する活動」について、「英語を読んで、概要や要点をとらえる活動をしていましたか」という質問に対して「そう思う」と答えた生徒が 56.1%（全国平均は、39.4%）と全国の平均よりも高い割合となった。

この結果から、聞く・読む活動から概要・要点把握の力を高めていることが推察される。

## ◎ 調査結果に寄与したと考えられる授業内の取組

### 1. テンポのある言語活動と ICT を活用した学習指導で効果的に 4 技能を高める

当校では、50 分×週 4 回という授業時間で、英語の 4 技能を効率的・効果的に習得させるために、テンポのある授業を行っている。最初に英語の曲などを歌った後、スピーキングを養う帯活動に入る。副教材『中学生のためのスラスラ英会話』を使いながら、アップテンポの曲をバックに、隣の生徒とペア・ワークをする。一つの言語材料を 7 時間ほどかけて練習するが、初回はワンフレーズをきちんと発音できているか、続いて、暗唱ができているか、そして、フレーズを自分の状況に合わせて変えて使うことができるかなど、段階的にレベルを上げて確認する。

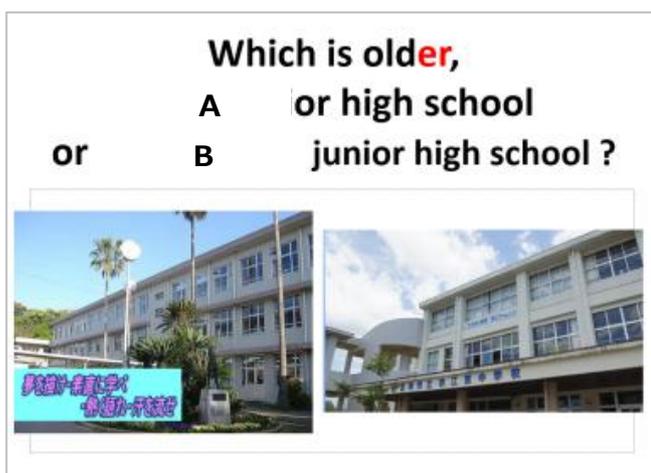
2、3 年生になると、長文読解に苦手意識を持っている生徒が多いことから、リーディングの技能を高める長文読解トレーニングを帯活動で実施している。教師が配布したプリントの長文を読めたら座る、次のステップでは、何が書いてあるか隣の人と話し合う。そして、3 年生になると、英語で要旨をまとめてリテリングできるように力を高めていく。中には、「すべてを日本語に訳したい」と考える生徒もいるため、実生活において要旨把握がいかに重要かを教員から丁寧に伝えていく。

こうした帯活動の後、教科書の学習活動へ入っていく。

テンポよく授業を進める上で利用しているのが、ストップウォッチとパソコンなどの ICT である。ストップウォッチで、活動時間を明確に区切ったり、文章をある程度のスピードで読みあげたりすることができるようにしている。

ICT では準備したパワーポイントを投影し、板書の時間などを極力削減している。イラストや動画、音楽などを用いることで、より生徒の注意を引きながら授業を展開することができている。図 1 は、「比較級・最上級の復習をしよう」という題材で使用したパワーポイントの投影資料だ。これらの資料は、当校の教員が利用するサーバーの共有フォルダにアップすることになっており、他の教師も自由に活用することができるようになっている。

図 1 授業の際に準備するパワーポイント資料



### 2. 習熟度別指導と評価のフィードバックで、生徒の意欲を高める

当校では、習熟度別に英語の授業を行っている。1 年生のゴールドエンウィークくらいの時期から、筆記テストや授業の様子、生徒からのアンケート、面談によって、学力と意欲を測り、アドバンスクラスとベーシッククラスに分ける。1 学級 35 名を、ベーシッククラスは 10 名未満、アドバンスクラスは 25 名～30 名程度となるが、ベーシッククラスは、少人数で指導できるようにとの配慮から、このような人数編成としている。その後は、定

期テストなどのタイミングで、クラスの入替えを行う。

この習熟度別の授業により、学力下位層の生徒の基礎学力を担保することにつながっている。また、少人数指導のため 50 分授業の中における生徒たちの発話の機会は増え、共同的な学習も実現しやすい環境となっている。このような環境整備により、生徒の意欲を高めることにつながっている。

生徒の意欲を高めるもう一つの工夫が、評価基準をあらかじめ示すことである。評価基準を明確化することで、生徒はどのように課題に取り組めばよいかを考えるようになる。スピーキングテスト、ライティングテストなど、どんなテストでも評価軸を明示し、さらに生徒のテスト結果も即時フィードバックすることとしている。図 2 は、中学 2 年生の「将来の夢を書きましょう」というエッセイライティングの課題に対する評価基準である。例えば、3 学年までに、10 文ほどは書けるようにしたいというねらいから、「文の数」が「7 文以上」の場合は、A という評価をしている。生徒でもわかりやすい基準となるよう工夫されている。こうしたシートも共有フォルダに保存されているため、教員間で評価の目線合わせが随時なされている。

図 2 ライティングの評価基準

<p>評価基準      以下の 4 つの観点を ABC で評価します。</p>			
<p>1 文の数    A 7 文以上               B 5 か 6 文               C 4 文以下</p>			
<p>2 単語の使い方 正しく、いろいろな語を使っていれば A 1 文にミスが 1・2 語なら                B ミスが多ければ                            C</p>			
<p>3 使っている文法 ①接続詞 if / when / that を使用 ②不定詞や動名詞を使用 ③助動詞 will / must を使用 以上の 3 つを使用していれば A 2 つを使用していれば B 1 つ以下ならば                            C</p>			
<p>4 内容 全体的に意味が通っていれば A 大まかに理解できれば                B 意味が伝わらなければ                C</p>			
1 文の数 (        ) 文	2 単語の使い方	3 使用文法 ① ② ③ を使用 ○を付けない。	4 内容

### 3. 他教科での指導におけるアクティブ・ラーニングの視点を英語の授業に応用する

当校は、「確かな学力を身に付けた児童生徒の育成～学習指導方法の工夫改善及び家庭学習の充実・徹底を通して～」という研究テーマで、アクティブ・ラーニングの導入を学校全体で推進している。取組の中では、年 3 回、教員間で授業を見合う、互見授業を実施している。自身の担当教科以外の授業を見学し、指導のヒントを得るケースも少なくないという。

例えば、社会の授業で「近畿地方が栄えた理由」を「歴史的背景」や「近代的な進化」などのヒントをもとに考えさせ、それらのヒントを持ち寄り、最終的な答えをグループで導くというジグソー法の授業に刺激を受け、英語科でも同様の指導法を取り入れることとした。具体的には、比較級の理解を促すというねらいから、比較級を用いたヒントをもとに、アニメのキャラクターを当てるという実践を行った。ジグソー法はグループ学習だが、個々がヒントを持ち寄って答えを導くため、一人一人が学習に責任を持たなければならない。その点から、主体的に学ぶ姿勢を育てていくことに有効だと考えている。

さらに、保健体育科や技術・家庭科など実技教科の指導法を英語の授業でも生かしたいと考えている。例えば、体育の水泳の授業での生徒の学び合いの活動が強く印象に残っているという。授業展開は次のようになっている。(1)生徒同士でバディを組み、互いにフォームをビデオで撮り合う。(2)録画映像を2人で見て、足の曲げ方などフォームの改善に向けて感想を言い合う。(3)バディからの指摘を基に、自身のフォームを修正しながら再度泳ぐ。

生徒たちは、フォームの修正前と後を認識しながら、学びを深めていくことができる。英語科でも、発音練習などでこの取組を活用できないかと構想しているという。

#### 教室からの声

当校では、入学時点から生徒の英語力の差が顕著になってきている。小学校の外国語活動だけでなく、家庭や校外学習で英語に触れる子が増加してきているためだと考えられるという。入学時点での差が、下位層の生徒の劣等感につながったり、逆に、上位層の生徒を浮いた存在にしてしまったりする危険性がある。そこで、英語の学力が高い生徒をリトルティーチャーとして活用し、生徒の関係性づくりを促すなどの配慮を行っている。

なかには、自分の伸びを実感し「こんなに英語が話せるようになるとは思わなかった」という声や、小学校での外国語活動と比較して「話すことは苦手だったけれど、書く勉強が入ってきて英語が好きになった」という感想も出てきている。

#### ◎ 授業以外の取組

##### 家庭学習の充実や、昼休み・放課後を利用したインプット学習の充実

家庭学習の時間と昼休み・放課後を利用した学習も充実させている。授業では、他の生徒もいるからこそできる共同的な学びを重視しているため、暗唱テストの内容を覚えてくるなどのタスク的な学習は、家庭学習の中で行うこととしている。最近では、宿題として課さなくとも、生徒たちが主体的に学んでくるようになった。

さらに、定期テストやスピーキングテストで不合格だった生徒は、昼休みや放課後などに指導している。授業時間は割かず、最後の一人まできちんと合格できるよう、教師は徹底的にフォローアップを行っている。

## スピーチやプレゼンテーションなど、「話す活動」を観点別に評価し、3年間通じて表現力を育成する

### ◎学校プロフィール（※学級数及び生徒数は平成28年10月調査日時点）

設立・形態	昭和56（1981）年設立
学級数・生徒数	18学級（540名）／第3学年…5学級（169人）（特別支援学級2）
ALT活用状況	非常勤1名。週2・3回来校し、各クラスには2・3週に1回程度入る。
取組の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中高で連携し、英語力を育成する</li> <li>・「話す活動」を目的別に分類し、独自評価基準を作成</li> <li>・明確なパフォーマンステストの評価基準と即時フィードバック</li> </ul>

### ◎試験結果、質問紙における学校の特徴 ・第3学年の平均スコア（点）

	Reading	Listening	Writing	Speaking
C中学校	89.1	101.1	37.2	8.4
全国平均	83.4／170	93.8／170	31.3／96	6.7／14

### ・生徒質問用紙結果

No.12 次の学年の英語の授業では、英語を読んで、  
（一文一文ではなく全体の）概要や要点をとらえる活動をしていましたか。

◎「そう思う」 ◎どちらかといえば、そう思う ◎どちらかといえば、そう思わない ◎そう思わない

実施年度	選択番号	◎	◎	◎	◎	無回答	計
平成28年度	回答数	72	54	22	4	7	159
	選択率	45.3%	34.0%	13.8%	2.5%	4.4%	100%



No.11 次の学年の英語の授業では、英語でスピーチやプレゼンテーションをしていましたか。

◎「そう思う」 ◎どちらかといえば、そう思う ◎どちらかといえば、そう思わない ◎そう思わない

実施年度	選択番号	◎	◎	◎	◎	無回答	計
平成28年度	回答数	88	54	25	10	4	181
	選択率	54.1%	21.4%	15.7%	8.1%	2.5%	100%



### 英語でスピーチやプレゼンテーションする活動の実施率が高い

4 技能すべてにおいて、全国平均スコアを上回った。アンケート調査では、「英語を読むことに関する活動」について、「英語を読んで、概要や要点をとらえる活動をしていましたか」という質問に対して「そう思う」と答えた生徒が45.3%（全国平均は、39.4%）と全国平均を上回った。

さらに、「英語でスピーチやプレゼンテーションをしていたか」という質問に対しても、「そう思う」と答えた生徒が54.1%（全国平均は、30.9%）と全国平均を大きく上回る結果となっている。

特に、スピーキング技能の育成に関する取組実施のスコアは高く、多様な活動を実施していると考えられる。

◎ 調査結果に寄与したと考えられる授業内の取組

1. 小中高で連携し、英語力を育成する

当校は小中高の 9 年間で接続し、「英語イノベーション事業」を実施している。年度始めには、担当者が集まり今年度の方針や取組を共有し合う。

当校教員が小学校の授業を見る機会は年 2 回ほどあり、希望すれば他の機会であっても授業見学することができるという。小学校の授業を見ることは、中学校の教員にとって刺激が多い。実際に、小学校の外国語活動で行われていた実践を授業に取り入れてもいるという。その一つが、ポキャブラリーを増やすための練習である。小学校では、「食べ物」などのカテゴリごとに、チャンツで単語練習をさせる。これまで当校では、新出単語のレッスンに終始してしまいがちであったため、カテゴリごとに単語の練習をすることとした。さらに、小学校では暗唱確認をする際、必ず一人一人の児童に当てる。この取組を見て、中学校でも、きちんと時間を取り、一人一人の習熟度を確認する時間を取る方針に舵を切った。

中高接続においては、中学生が高校生と一緒に授業を受ける機会を設けている。昨年度は中学 2 年生と高校 2 年生で、「日本の力」というテーマでプレゼンテーションをし合う授業を行った。プレゼンテーション後は、発表についての意見や感想を交換した。今年度は、図 1 の指導案のとおり、「世界に誇る日本の偉人(Japanese Persons We Are Proud of to the World)」というテーマで中学 2 年生と高校 1 年生で合同授業が実施された。中学生 2 名・高校生 2 名でグループをつくり、中学生が高校生に向けてプレゼンテーションを行う。それに対して、高校生が即興的に質問やコメントをする。中学生は、その質問に答え、さらにテーマを英語で掘り下げていく。準備どおりにプレゼンテーションを行うだけでなく、より即興的で双方向性の高い言語活動を実現することができた。

図 1 英語科 学習指導案 本時の展開

<p>例) I will tell you about Sugihara Chiune. <u>Do you know about him?</u>  <small>(この質問に対しての中学生の反応を見て、どのようにその後プレゼンテーションを続けていくかを考えながら話す。Yes, I do. と反応があった場合、中学生がその人物について知っている情報を引き出すような質問(Where was he born? What did he do in his life?)などをする。No, I don't. と反応があった場合、どのようにプレゼンの続きへと移行していくかを考える。(コミュニケーションを深める)</small></p> <p>例) Sugihara Chiune wrote a lot of <u>visas</u> for Jewish people.  <small>(中学生が visas の意味が分からないような雰囲気であるとき、OK, visas are like passports, などと言い換えをして、中学生に理解を促す。また、Jewish という言葉は中学校では未習のため、Jewish people are people in this area. など、ビジュアルカードにある情報を用いて中学生に説明をする。)</small></p>		
<p>【人物カテゴリ】          中学生：アスリート、文化人          高校生：アスリート、文化人、歴史上の人物、政治家          もしくは科学者</p>	<p>【聞き手に対する留意点】          ・積極的にプレゼンテーションを聞くこと          ・それに対する反応を示すことができるか確認する。          ・ペアのプレゼンテーションに対して、質問があれば積極的に英語で尋ねる姿勢があるかを確認する。</p> <p>【高校生のコメントに対する留意点】          ・ペアの中学生がプレゼンテーションした人物に対しての感想を即興的に述べる。          ・ペアの英語を聞き、理解し、自分の言葉で言い換えることができるように促す。また、なぜそのような感想を持ったのかという理由も付け加える。</p>	<p>・コメントをする際には、相手の伝えた内容を踏まえて即興的に英語を使用することができるかを確認</p>
<p>5. Advice Time          ・中学、高校それぞれの教員からのプレゼンテーションに関するアドバイスを聞く。(3分)</p>	<p>・「考えて話す」ことを全体に伝える          ・よい姿の生徒を取り上げ、次の活動に繋がるポイントを提示する</p>	
<p>6. Challenge Time②          ・高校生が席を移動し、新しいグループ内で自己紹介をする。(1分)          ・4.Challenge Time①と同様に活動を行う。(合計1.2分)</p>	<p>(Challenge①と同様)          ・アドバイスタイムで得たものを、活動の中で活かすことができるように促す。(組間監視をしながら)</p>	
<p>7. Feedback Time          ・プレゼンテーション活動を通して見つけた良いところを共有する。          ・指名された高校生3人は、本時の感想を英語で発表する。          ・中学生1人、高校生1人が、本時の感想及びお互いに対してのお礼の言葉を英語で発表する。</p>	<p>・高校生の教員は、これからの言語活動で活かして欲しい姿をピックアップし、発表する。全体で共有できるように促す。          ・指名した高校生3人に対して、インクビュー形式で感想を求める。発言した内容に対して前向きなコメントをする。          ・情報を英語で共有することの大切さ、難しさ、そして楽しさを伝え、今後の活動に活かしていけるようにまとめる。</p>	<p>①関心・意欲・態度          一生徒の応答</p> <p>②関心・意欲・態度          ③理解の能力          一生徒の応答</p>
<p>まとめ</p>	<p>5分</p>	

## 2. 「話す活動」を目的別に分類し、独自評価基準を作成

当校では、特にスピーキングの力を養うことを重視している。そこで、「話す活動」を分類し、付けていくべき力をより明確化させている。そのために運用しているのが、「SDIP リスト」(図 2)だ。SDIP とは、「S…Speech」「D…Debate」「I…Interview」「P…Presentation」の頭文字を取った造語である。「話す活動」を即興的なものか・準備されたものかという軸と、一方的なものか・双方向的なものかという軸で分けた。この 2 軸を基に、スピーキング活動を 4 象限に分類。「一方的で、即興的なものが、ディベート」「一方的で、準備されたものが、スピーチ」「準備されて、双方向的なものが、プレゼンテーション」「即興的で、双方向的なものが、フリートーク」と整理した。

この分類の中で、当校において伸ばしたい力はどんなものかと教員間で検討したとき、プレゼンテーションなどある程度準備がされたものは上手にできるが、即興的で双方向的の高いフリートークなどの力は不十分だという結論に達したという。そこで、今年度は「フリートーク」活動に力を入れることとした。こうした方針は、年度当初の教科会で共有され、各々の教員が目標に沿った授業を作り上げていく。例えば、帯活動で行うスピードインプットの題材をインタビュー形式のものに変更した。“What food do you like?” から始まる対話を、教員と ALT などで見本を見せ、“I like curry.” “What curry do you like?” “I like chicken curry.” “Oh, is it spicy curry? Mild curry?” “I like spicy curry.”などと対話をしていく。この対話モデルを、次のフリートークの活動では、“curry”の部分で“ramen”などに替えて、生徒たちにペアで対話をさせる。スピードインプットで、型・枠組みを提示した上で、自分で考えられる要素を入れて、フリートークを発展させていく。また、フリートークした内容を、ライティングさせる。これを回収し、教師が確認している。毎授業、約 10 分を使い、ここまでの帯活動を実施する。

この「SDIP リスト」は、中学 3 年間使うものとして、PABC で評価している。P はプリペアード、A は中学一年次レベル、B は中学 2 年次レベル、C は中学 3 年次レベルである。例えば、1 年次の「自分でお気に入りの人を紹介する」という活動で、紹介する人の特徴や名前、職業などの基本情報を発表できれば、「SDIP リスト」でいうとレベル A に該当する。2 年次には、紹介する人の基本情報を述べた上で、「昔何をしていたのか」「その人を尊敬する理由」などを付け加えていく活動に発展させる。これは、B レベルに該当する。このように、「SDIP リスト」を運用することにより、学年をまたいで、生徒のスピーキングのレベルを押し量っていくことができる。

図 2 SDIP リスト

# SDIPリスト

( )年( )組( ) 氏名( )

	Presentation	Free Talk/Interview	Debate
S	新聞の記事やニュースなどから見つけた自分が関心のある社会的問題や時事問題について課題研究したことを、自分の立場だけでなく、相手と問答し <b>他の可能性を根拠にし</b> ながら、5分程度説明することができる。	新聞記事やニュースなどから見つけた自分が関心のある社会的問題について、 <b>相手の立場や状況を汲み取りながら</b> 自分の考えを述べ、不自然な間がなく5分程度対話することができる。	新聞の記事やニュースなどから得た身近な社会的問題や時事問題について、自分の考えとその根拠を不自然な間がなく順序立てて話すことができる。また、相手の主張や意見に対して、できる限り即興で反論で
C3	与えられた事物について、自分の立場だけでなく、 <b>別の事と比較しながら</b> 根拠を明確にもち、 <b>相手と問答したり</b> 、相手の興味や意向に合わせて話したりしながら、適切な資料を用いて <b>5分程度</b> 説明することができる。	相手の立場や状況を汲み取りながら自分の考えを述べ、 <b>お互いに</b> 話題を広げたり深めたりしながら、不自然な間がなく <b>5分程度</b> 対話することができる。	<b>聞いたり、読んだりした</b> 身近な内容について、自分の考えとその根拠を <b>不自然な間がなく</b> 順序立てて話すことができる。また、相手の主張や意見に対して、できる限り即興で反論できる。
C2	与えられた事物について、自分の立場とその根拠を明確にもち、相手に質問したり、相手の質問に適切に回答したりしながら、 <b>適切に資料を用いて3～4分程度相手の興味や意向に合わせて</b> 説明することができる。	相手の立場や状況を汲み取りながら自分の考えを述べ、さらに話題を広げたり深めたりしながら <b>不自然な間がなく3分程度</b> 対話することができる。	与えられた身近なテーマについて、自分の考えとその根拠を順序立てて話すことができる。また、 <b>相手の主張や意見に対して、できる限り即興で反論</b> できる。
C1	与えられた事物について、 <b>自分の立場とその根拠を明確に</b> もち、相手に質問したり、相手の質問に対して適切に回答したりしながら、 <b>3分程度</b> 説明することができる。	与えられた身近なテーマについて自分の考えを述べ、 <b>さらに話題を広げたり深めたりしながら</b> 、反応よく2～3分程度対話することができる。	与えられた身近なテーマについて、 <b>立場を明確にし</b> 、自分の経験などを根拠としながら、順序立てて話すことができる。
B3	与えられた身近な事物について、必要な資料を適切に示し、相手に質問したり、相手の質問に対して適切に回答したりしながら、 <b>2～3分程度</b> 説明することができる。	与えられた身近なテーマについて、 <b>自分の考えを述べたり、お互いの質問に対して詳しく答えたりしながら</b> 、反応よく <b>2～3分程度</b> 対話することができる。	与えられた身近なテーマについて、自分の考えを <b>自分の経験などを</b> 根拠としながら、 <b>順序立てて</b> 話すことができる。
B2	与えられた身近な事物について、必要な資料を適切に示し、相手に質問したり、 <b>相手の質問に対して適切に回答したりしながら</b> 、2分程度で説明することができる。	身近な内容、経験、予定などについて、お互いの質問に対して1文付け加えながら、反応よく <b>2分程度</b> 対話することができる。	与えられた身近なテーマについて、自分の考えを <b>根拠をもとにしながら</b> 話すことができる。
B1	与えられた身近な事物について、必要な資料を適切に示したり、 <b>相手に質問したりしながら</b> 、2分程度で説明することができる。	身近な内容、経験、予定などについて、 <b>お互いの質問に対して1文付け加えながら</b> 、反応よく <b>1～2分程度</b> 対話することができる。	与えられた身近なテーマについて、自分の考えを話すことができる。
A3	身近なものや人、 <b>生活</b> について、絵や写真を <b>適切に</b> 示したり、 <b>相手に質問したりしながら</b> 、 <b>1分程度</b> で説明することができる。	自分の好きなスポーツや食べ物について、反応(うなずき、相づち、キーワードを繰り返す)をしたり、 <b>お互いに質問したりしながら</b> 、1分程度対話することができる。	
A2	自分の身近なものや人について、絵や写真を見せながら、 <b>まとまりのある10文程度</b> で説明することができる。	自分の好きなスポーツや食べ物について、 <b>反応(うなずき、相づち、キーワードを繰り返す)</b> をしながら、1分程度対話することができる。	
A1	<b>自分の身近なものや人について</b> 、絵や写真を見せながら、5文程度で説明することができる。	自分の好きなスポーツや食べ物について、うなずいたり、相づちをうったりしながら、 <b>1分程度</b> 対話することができる。	
P	自分の好みや考えを、写真や絵を見せながら、5文程度で説明することができる。	自分の好きなスポーツや食べ物などについて、うなずいたり、相づちをうったりしながら、30秒程度対話することができる。	

### 3. 明確なパフォーマンステストの評価基準と即時フィードバック

当校では、定期的にパフォーマンステストを実施している。今年度はフリートーク力の育成に力を入れているため、ALT と生徒が 1 対 1 で対話をし、教師がその様子进行评估する形をとっている。考えた内容を話せたかという「内容」、既習事項を取り入れることができているかという「材料」、不自然な間などがなかったかを見る「話し方・聞き方」の観点に分けて、ルーブリック評価表（図 3）で評価する。

生徒には、パフォーマンステストの前に評価する観点を共有し、さらにテスト後すぐに評価結果と評価理由をフィードバックする。評価軸を生徒と共有していくことにより、指導と評価の一体化が図られ、教師だけでなく生徒自身も「即興性のある双方向的なスピーキングの技能を身に付けていくことが必要だ」と認識することができる。

より対話力を身に付けさせるために、単元の終わりに、「対話」に重きを置いた活動もスタートさせた。具体的には、対話が途切れてしまった際に、新たなトピックを見つけるためのヒントを伝えている。「相手について知っていること」や「自分の興味があること」などから、話題を広げていけることを伝えている。こうした技法を生かし、パフォーマンステストに臨む生徒も少なくない。英語力だけでなく、コミュニケーション能力を高める活動につながっている。

図 3 ルーブリック評価表

#### ルーブリック評価表

	Speed Input	Free Talk	Reading	Retelling / Roll play	
内容	A	内容を考えながら話せた	互いの質問に対して 1 文付け加えながら話せた	本文の内容がよく分かり、その根拠を言える	教科書を見ずに、内容を考えながら話せた
	B	考えた内容を話せた	互いに質問し合って話せた	本文の内容がよく分かった	教科書をたまに見ながら読み取った内容を話せた
	C	伝えたいことを十分話せなかった	途中で対話が止まった	本文の内容がよく分からなかった	読み取った内容を十分話せなかった
材料	A	最近学習した文法や単語を使って話せた			
	B	主語・動詞のある英文で話せた			
	C	伝えたいことを十分話せなかった			
話し方・聞き方	A	適度な声の大ききで、反応よく話せた			適度な声の大ききで、反応よく話せた
	B	適度な声の大ききで、不自然な間がなく話せた			適度な声の大ききで、不自然な間がなく話せた
	C	途中で対話が止まった			途中で対話が止まった

#### 教室からの声

小学校の外国語活動を経験し、英語で話すことに慣れてきている生徒も少なくない。しかし、中学校一年次の序盤は気恥ずかしさから、なかなか生徒同士の学び合いが進まないこともあるという。

そういった際に、即興性が高く双方向的なフリートークの活動は生徒たちの相互理解を深めるのに有効だという。教員がフリートークのテーマを、「本を紹介し合おう」「知らなかった仲間たちの一面を聞き出そう」などと設定することで、英語の授業を学級経営にも生かしていくことができる



## 即興性の育成と技能統合型の言語活動を取り入れ、 高次のスピーキング力とライティング力を養う

### ◎学校プロフィール（※学級数及び生徒数は平成 28 年 10 月調査日時点）

設立・形態	平成 22（2010）年、併設型中高一貫校として設立。高校は SGH 指定校。
学級数・生徒数	9 学級（313 名）／第 3 学年…3 学級（105 人）
ALT 活用状況	常勤 1 名。週 1 回程度、各クラスの授業に入る。
取組の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・即興的なトレーニングで、スピーキング力を鍛える。</li> <li>・スピーキングを中心に据えた技能統合的活動を取り入れる。</li> <li>・高校への授業見学でヒントを得た、ライティング・リテリング指導の導入。</li> </ul>

### ◎試験結果、質問紙における学校の特徴

#### ・第 3 学年の平均スコア（点）

	Reading	Listening	Writing	Speaking
D 中学校	167.4	163.0	60.9	13.4
全国平均	83.4 / 170	93.8 / 170	31.3 / 96	6.7 / 14

#### ・生徒質問用紙結果

<学校の英語の授業について>

最も当てはまるものを 1 つ選んで下さい。

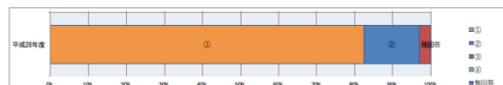
（英語を話すことに関する活動）

No. 14 次の学年の英語の授業では、与えられた課題について、  
（特に準備をすることなく）即興で話す活動をしていましたか。

① 第 3 学年

① そう思う ② どちらかといえば、そう思う ③ どちらかといえば、そう思わない ④ そう思わない

学年/年度	選択数	①	②	③	④	無回答	計
平成 28 年度	34	11	11	9	3	0	102
	選択率	32.4%	14.7%	2.9%	3.0%	0.0%	100%



<学校の英語の授業について>

最も当てはまるものを 1 つ選んで下さい。

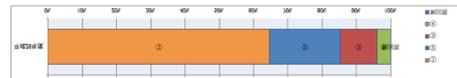
（英語を書くことに関する活動）

No. 15 次の学年の英語の授業では、聞いたり読んだりしたことについて、  
その内容を英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりしていましたか。

① 第 3 学年

① そう思う ② どちらかといえば、そう思う ③ どちらかといえば、そう思わない ④ そう思わない

学年/年度	選択数	①	②	③	④	無回答	計
平成 28 年度	68	11	11	4	0	0	102
	選択率	10.7%	10.8%	3.9%	0.0%	0.0%	100%



#### 即興的な活動や、英語で自分の考えを 書く活動の実施率が高い

4 技能すべてにおいて、全国平均を大きく上回っている。ここで特筆したいのは、リーディングとスピーキングについてである。

アンケートでは、「英語を話すことに関する活動」について、「（特に準備をすることなく）即興で話す活動をしていましたか」という質問に対して「そう思う」と答えた生徒が 82.4%（全国平均は、18.5%）と圧倒的に多かった。

さらに、「英語を書くことに関する活動」について、「英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりしていましたか」という質問に対して、「そう思う」と答えた生徒が 64.7%（全国平均は、28.9%）と過半数を上回っていた。

## ◎調査結果に寄与したと考えられる授業内の取組

### 1. 即興的なトレーニングで、スピーキング力を鍛える

同校では、すべての授業においてスピーキングの即興性を養う 5 分程度のペア・ワークを取り入れている。事前の準備なく、その場で考え、話すことを重視しているのだ。教師は教科書のテーマなどをアレンジしてワークシートを作成し、生徒はそれに基づいてペア・ワークを行う。図 1 のとおり、下線部を自由にアレンジして対話をする。例文では、「the Skytree in Tokyo」を紹介し、「It's a very large building. It's six hundred and thirty-four meters tall, and one of the tallest buildings we can see in the world.」としており、生徒たちはこの部分を自由に自身が勧めたい観光地などにかえて紹介する。「富士山」「金閣寺」「厳島神社」や自校を紹介する様子が生徒には見られた。

他にも、「間違い探し」を授業に取り入れ、話すことに抵抗感をなくしている。これは、授業で学んだ「there be 構文」や現在進行形、単語などを用いながら、左右の絵の違いを指摘していく活動である。ゲーム感覚で生徒が夢中になりやすく、自然と表現の幅が広がっていく。

図 1 即興性を養う活動に使用するワークシート (例)

### Lesson10-3

A : Aren't you from Japan, (name) ?

↵

B : Yes, I am. Is there anything that you want to ask me?

↵

A : Yes. I'm planning to visit Japan during the New Year holidays.  
What is the best thing that you can recommend to me?

↵

B : Well..., it's a difficult question because we have a lot of good  
things to see in Japan. Don't you know the Skytree in Tokyo ?

↵

A : No, I don't. What's that?

↵

B : It's a very large building.

It's six hundred and thirty-four meters tall,

and one of the tallest buildings we can see in the world.

↵

A : Wow! I want to see it when I go there.

↵

<place>

## 2. スピーキングを中心に据えた技能統合的活動を取り入れる

さらに同校では、スピーキングを中心に据えた技能統合型の言語活動を重視している。1年次でスキット、2年次でディスカッション、3年次はディベートの活動ができる能力の育成を目標にしている。

具体例を紹介しよう。3年次では本格的なディベートにつなげるために、マイクロ・ディベートを実施している。図2の通り、6人チームをつくり、肯定側・否定側・審判として2人ずつ3つに分かれ、立論→質疑応答→反駁の順でディベートを進めた。1時限目は、ルールの説明や流れの確認などを行う。2、3時限目は練習的に英語でマイクロ・ディベートを実践するが、何も準備がない状態でディベートを行うことは難しいため、まず立論に対する自分の考えなどのポイントを書き出す課題に取り組む。それをもとに、肯定側・否定側英語でマイクロ・ディベートを行う。なお、審判も英語だけでコミュニケーションを図る。こうした型を学んだ上で、4、5時限目は15分×3セットでマイクロ・ディベートを行った。自分の思いを伝えるだけでなく、論理的に英語の文章を組み立てる力を養い、3年次での活動へとつなげた。

こうしたスピーキング活動は、英語科の担当教員とALTの2名で観察し評価をする。年2回ほどパフォーマンステストを行うので、生徒たちはスピーキングにおいて、どのような評価基準か、何が求められているかを認識している。その基準に沿って、ライティングからのスピーキング活動を充実させることができている。

図2 マイクロ・ディベートのルール一覧

■マイクロ・ディベート

肯定側・否定側・審判の3つに分かれて行います。進行の流れは以下を予定。

- ①準備（日本語）2分
- ②肯定立論（英語）1分
- ③否定立論（英語）1分
- ④準備（日本語）2分
- ⑤否定反駁（英語）1分
- ⑥肯定反駁（英語）1分
- ⑦自由討論（英語）2分
- ⑧判定（日→英）1分

	肯定	否定	審判
1回戦	A	B	C
2回戦	B	C	A
3回戦	C	A	B

※質疑応答を挟む。公の発言は英語。

■立論（Constructive Speech）とは

両チームが論題に対する自分たちの基本的な考え方を発表します。「学校Aは制服を廃止すべき」という論題であれば、肯定側は廃止することのメリット、否定側は廃止することのデメリットを述べる。

■質疑応答（Cross Examination）とは

各立論の後で、その内容について質問します。わからなかった点を確認したり、相手の議論の弱いところを明らかにする。

■反駁（はんぱく）（Rebuttal Speech）

相手の立論に対して反論を行ったり、反論された立論を立て直す。

■特徴

- 1 明確な「                    」（proposition / resolution）→「～は～すべきである。」など
- 2 「                    」（affirmative side）か「                    」（negative side）の立場をとる。  
→中立的な立場はない。
- 3 「                    」（affirmative side）か「                    」（negative side）かは本音とは無関係である。  
→ディベートを行う直前に決められる。
- 4 ディベートで一番重要なものは「                    」（reason）と「                    」（evidence）である。  
→主観的なものよりも客観的な「                    」（evidence）がものを言う。
- 5 発言は、同じ制限時間で、交互（alternative）に行われる。
- 6 相手を言い負かすのではなく、「                    」（judge）を説得する。

### 3. 高校への授業見学でヒントを得た、ライティング・リテリング指導の導入

併設型中高一貫校の同校は、中学と高校の意見交換を一般の中学校より行いやすい環境にある。高校の教師の授業を見学し、指導のヒントを得ることも多い。

高校教師の授業をヒントとして取り入れた活動の一つ目として、エッセイライティングがある。生徒たちは、「The history of glasses」という単元で、眼鏡の歴史を探るという内容の英文を読む。そこでの学びを生かし、「The history of ○○」として、自分の興味があるものの歴史を調べ、ワークシートにライティングする活動を行った。高校の授業で、教科書に書いてあるテーマから派生させて自分の考えをライティングする授業を行っていたので、中学でも取り入れようと考えた。

「The history of myself」「The history of my school」などのテーマで記述する生徒が多かったが、趣味の電車について調べてくる生徒もいれば、好きなバンドについて書いてくる生徒もいた。たくさん書けるようにと、ワークシートの記入スペースを多く取ったが、ほとんどの生徒がここをうめつくすように記述し、裏にまで書いてくる生徒がいるほどだった。辞書を使うことを自由とし、時間が足りない場合には家で書くことも OK とした。

回収したエッセイは、ALT が添削し構文のチェックやスペルの確認まで行う。

二つ目の活動は、リテリング指導だ。高校では、長い文章を読ませ、その内容をリテリングさせている授業を実施している。それを見学した中学教師が、絵本のような題材で同様の活動ができるのではないかと考えた。3、4ページほどのリーディングの物語教材に、教師がイラストを付けて、その内容を生徒が教科書で学んだ構文を使いながら、リテリングした。

教師たちは、上位層の生徒たちはリーディングの教材であっても「ライティングやスピーキングのアウトプットに使える要素はないか」という視点で読むことができていると感じている。「この表現面白いな」と思えば、すぐに自分の言葉として使ってみる主体性を持つ子どもたちが少なくない。こうした姿勢を、さらに多くの生徒たちにつなげていくことを後の狙いとしている。

#### ◎授業以外の取組

##### 「総合的な学習の時間」を活用し、「イングリッシュキャンプ」を実施

同校の「総合的な学習の時間」は、「サイエンティフィック・リサーチ」、「キャリア・スタディ」、「インターナショナル・スタディ」の3本の柱からなる。その中のインターナショナル・スタディの活動として、2年次に2泊3日の「イングリッシュキャンプ」を実施する。これは、すべての活動を英語で行う合宿である。最終日に生徒たちはプレゼンテーションを実施する。その準備は1か月半ほど前から20時間かけて積み重ねていく。準備段階では、生徒たちが運営の「イングリッシュキャンプ実行委員会」で、英語でのしおりを作成し、キャンプ冒頭の挨拶なども考えていく。

セレモニーでは学年主任が前に立ち、「ここからは英語で会話しよう！」と宣言すると、生徒同士も英語で対話する。生徒は2泊3日にわたり12グループに分かれて行動するが、各グループに1人ALTがつき、指導を行う。

「イングリッシュキャンプ」の1日目は、「自分の家族に手紙を書く」「研修旅行での、飛行機の移動について話し合う」「研修旅行先の国について調べる」という3つのテーマ別に活動する。時間を区切り、グループごとに体験した。夜には、ALTとの会話やレクリエーションを実施し、「アートグループ」「ダンスグループ」などができ、生徒たちは自分の興味に合わせて楽しみながら英語を学んだ。2日目の午前中は、全体講義であるが、一方的な講義ではなく、研修旅行先の国の食事について、「どちらの料理が高いか？」などのクイズ形式を取り入れた。ALTへ質問をしながら、答えにたどり着くフローとした。

2日目の午後からはプレゼンテーションの準備に取り掛かる。原稿内容やプレゼンテーション資料は1か月半かけて十分作り込んできたが、実際に発表となると、クリアに英語で表現できるまでに至っていないことがわかった。そこで、ALT に英語の発話の指導を重点的に依頼し、本番に備えさせた。

生徒たちの十分な準備もあり、プレゼンテーションは聞き応えのある内容となったという。生徒たちにとって、英語力の伸張を実感するとともに、思い出深い行事であったといえる。

## スピーキングの場面設定とライティングの徹底指導に加え 小中連携を組織的に行う

### ◎学校プロフィール（※学級数及び生徒数は平成 29 年 1 月調査日時点）

設立・形態	昭和 50（1975）年
学級数・生徒数	17 学級（約 641 名）／第 3 学年…6 学級（218 人）
ALT 活用状況	非常勤 1 名。3 校持ち回りで、1 回につき 3 週間常駐する
取組の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション場面を意識した会話学習の充実</li> <li>・自宅学習の徹底などでライティング力を伸ばす</li> <li>・授業実践や研修の実施などで、小・中学校の連携を実現</li> </ul>

### ◎試験結果、質問紙における学校の特徴

#### ・第 3 学年の平均スコア（点）

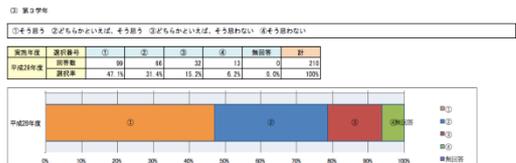
	Reading	Listening	Writing	Speaking
E 中学校	82.3	94.5	35.0	11.9
全国平均	83.4 / 170	93.8 / 170	31.3 / 96	6.7 / 14

#### ・生徒質問用紙結果

No. 13 次の学年の英語の授業では、聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で問答したり意見を述べ合ったりしていたと思いますか。



No. 15 次の学年の英語の授業では、聞いたり読んだりしたことについて、その内容を英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりしていたと思いますか。



#### 生徒同士で話したり、書いてまとめたりする活動が充実

4 技能において、スピーキングとライティングが特に高い得点結果となった。授業においても、話す機会や書く指導が充実していると考えられる。

アンケートでは、「英語を話すことに関する活動」について、「生徒同士で英語で問答したり意見を述べ合ったりしていたと思いますか」という質問に対して「そう思う」と答えた生徒が 58.6%（全国平均は、34.4%）と多かった。

さらに、「英語を書くことに関する活動」について、「英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりしていたと思いますか」という質問に対して、「そう思う」と答えた生徒が 47.1%（全国平均は 28.9%）となった。自分の考えをアウトプットする機会が充実していると推察できる。

## ◎ 調査結果に寄与したと考えられる授業内の取組

### 1. コミュニケーション場面を意識した会話学習を充実

同校では、これまではリーディングとライティングを重点的に行ってきたが、スピーキング活動についても重点的に行うように舵を切った。全国学力・学習状況調査の結果から表現活動の部分が弱いという結果が見て取れたからである。表現活動の充実は、英語科だけのことではない。表現活動というウィークポイントを解消するために、全教科あげて言語活動を推進してきた。現在は、教科問わず授業見学や研修などを重ねて、教師たちは指導力の研鑽を重ねている。

英語科は、スピーキング活動を強化。対話の活動「Let's talk!!」の中で重視しているのは、会話の場面を具体的に設定することである。普段の友達との会話の延長線上に、英語での会話もあるのだということを意識させている。そのため、挨拶を必ずする、アイコンタクトの大事さを認識させる、「I see.」「Good idea!」などの相づちを入れる、「Thank you.」「Good bye.」などを口に出して表現するということを重視している。

こうした会話のルールを徹底することで、英語の授業を通じて、子どもたちの普段のコミュニケーション能力をも育んでいくことができると考えている。

また、取り上げるテーマも生徒が会話の場面をイメージしやすいものとしている。図 1 では、「相手に「～したことがありますか」(Have you ever ~?) と聞いてみよう」というテーマとしている。他にも、「あなたは何回～したことがありますか」(How many times have you been ~?) や、「～の仕方を知っていますか」(Do you know how to ~?) などのテーマでスピーキング活動を行っている。

「Let's talk!」の活動は、ペア・ワークで行うことがほとんどである。「スタート」と「ストップ」の掛け声でメリハリをつけて、相手をかえて会話を行う。ペア・ワークでは、最初は慣れ親しんだ隣同士などで練習し、自信がついてからは教室中を歩き回りながら相手を見つけて話をする。「最低 3 人とは話をしようね」や「異性の子と一人は話そう」など、生徒の実態に合わせてルールを加えていく。すべての授業にこうした活動が入るので、生徒たちには話すことへの抵抗感がなくなっていく。

一方で、会話の活動は、「やりっぱなし」になりがちである。同校では、その問題点をクリアするために、スピーキングタイムの最後にいくつかのペアなどを指名し、クラスメイトの前で発表させる。正しくできていなければ、できるペアが現れるまで指名し続ける。そうすることで、活動に対して緊張感を持って取り組めるようにしている。

さらに、その日学んだ会話文をワークシートに落とし込み、文法を理解し定着しているかを推し量ることもする。スピーキング活動とまとめ・定着の時間をセットで設計することで、生徒の力を伸ばすことができている。

図 1 「Let's talk!!」現在完了形での会話文練習

# Let's talk!!

p22

～したことある?～

Step1) 次の絵について「相手に～したことがありますか。」と聞いてみよう。

played golf 	cooked curry 	used the Internet 	had an operation 
told a lie 	eaten <i>namako</i> 	seen a UFO 	written a letter in English 

Step2) one, two, three でじゃんけんし 勝ったら A 負けたら B で会話しよう。終わったら交代だ!

A: Hello.

**Have you ever** ( played golf )?

B: Yes, I have. I have ( played golf ) **once/ twice / three times . . . / many times** ?  
または

No, I haven't. I've **never** ( played golf ).

A: Oh, I see. / Really? / Wow!!

Step3) 相手に聞いたことをメモしよう。

聞いた相手の名前	したことある ➡ ○ したことない ➡ ×	○の場合 何回?

Step4) 友達に聞いたことを文にしてみよう。

例) Hiroshi has seen a UFO many times. (ひろしは何回も UFO を見たことがあります。)

---

## 2. 自宅学習の徹底などで、ライティング力を伸ばす

インプットとアウトプットのバランスを意識したライティング指導も重視している。インプットでは、ドリルのような教材やプリント課題を徹底的に自宅学習させる。授業で学んだことを家庭で振り返る時間をきちんと取ることで、確実なインプットがなされるのである。

「提出物は出すのが当たり前」という雰囲気を学校全体で醸成し、提出率 100%になるまで指導を繰り返す。これは、学習指導面ではもちろん、生徒指導面においてもルールをきちんと守ることは大切だという考えからである。以前は、生徒の問題行動などが見られた本校だが、教師の意識的な改革に生徒が呼応する形で、学校の雰囲気が大きく変わった。現在は、文武両道を重んじ、学習も部活動も盛んな落ち着いた学校となっている。しかし、そうした学校風土も、課題提出一つをおろそかにしたことで、崩れていくこともあるという。この教師の危機意識が自宅学習習慣の徹底に結びついている。

こうして定着した英語力をアウトプットするライティング活動を授業に設けている。例えば、3年次の教科書で環境問題についてのリーディング教材があるが、それを基に「自分自身の環境問題についての考えを書きなさい」という課題に取り組みさせた。生徒は、「I think～」「○○ is good, but I～」というように自分の意見をまとめる。授業中にノートにライティングさせ、教師が机間指導をしながらチェックをした。なお、自分で一通り書けた後にグループになり、代表者を決めて、発表をするという活動にまで発展させた。グループの話し合いも、英語で実施している。日頃ペア・ワークで習得している、「Good idea!」や「Next.」などの相づちや促しを使いながら話し合いを進めていった。生徒の中からは、「エコバックを持つようにして、スーパーのビニール袋はもらわないようにしましょう」「ペットボトルを必ずリサイクルに回す」などの意見が出た。

こうしたライティング活動は、「将来なりたいもの」「日本の文化を紹介しよう」などのテーマでも実施する。

1年次のうちは、長文をうまく書けないことが多いので、

- (1) 伝えたいことを箇条書きにし、筋道を立ててみる
- (2) 具体的な物事が挙げられているかを確認し（「日本の文化」というテーマであれば、折り紙など）
- (3) 最後に結びの言葉を入れる

という流れを教師が示していく。辞書で調べるなどは生徒の自由である。授業中に時間が足りない場合には、自宅で加筆してくる生徒もいる。ライティングした内容は、スピーチにまでつなげて他の生徒の前で発表させる。また、定期テストでも、既習の文法を使いライティングをさせる問題を出題する。その際には、「問 1 あなたは、ジェーンを●●中学校吹奏楽部の定期演奏会に誘うことにしました。『私と一緒に来ませんか。』と相手を誘うとき、英語で何と言いますか。（7語）」など、語数の目安を指定して、作文させるようにしている。

### 図2 ライティングの定期テスト設問

14 あなたのクラスにアメリカ人留学生ジェーン (Jane) がやって来ました。下の間に答えなさい。各問、語数指定に注意すること。ただし、クエスチョンマーク (?) などの記号は語数にふくまれません。(各 2 点×4=8 点)



問1 あなたは、ジェーンを  中吹奏楽部の定期演奏会に誘うことにしました。「私と一緒に来ませんか。」と相手を誘うとき、英語で何と言いますか。(7 語)

問2 定期演奏会に来てくれることになったジェーン。しかし、彼女は文化ホールへの行き方が分かりません。「私に文化ホール ( Culture Hall ) への行き方を教えてくださいませんか。」と英語で何と言いますか。(8 語。ただし、文化ホールという語は含めません)

問3 最近、とても寒くなってきました。そこで、あなたの家で「こたつ」を使用していることをジェーンに知らせると、彼女は「こたつ」が何なのか知りません。「こたつ (a kotatsu) は冬に使われるテーブルです。」と英語で教えてあげてください。(8 語)

問4 ある日、あなたがジェーンに日本語で話しかけると、「どういう意味ですか。」と英語で言われてしまいました。英語で何と言われたのでしょうか。(6 語)

### 3. 授業実践や研修の実施などで小・中学校の連携を実現

同校は、市教委の事業「外国語巡回指導研修」に指定されており、英語科の教員が外国語活動の指導員として市内の小学校を回り、小学校教員に指導する活動を担っている。小学校教員の英語指導力向上を企図した事業である。

小学校の校内研修の時間を使い、英語のゲームの紹介や発音練習の方法、ICT 機器の外国語活動への導入方法などについて情報共有する。現在は、次期学習指導要領に備え、小学校の教員の問題意識が高い。そのため、研修には全校体制で参加する。

事業は 1 年かけて行う。3 つのステップで教員のスキルアップを計画している。1 学期は、中学校教員が自身の授業を見せる、2 学期は小学校教員と中学校教員で TT を組み、双方サポートしながら授業を構築する。振り返りの評価も入れながら、スキルアップを図っていく。3 学期には、小学校の教員一人で英語の授業を行い、それを周囲の意見を交えブラッシュアップをする。この事業を担当している中学校教員は、「小学校の教員は、児童との距離が近く、特性もよく把握しているため、対話を中心とした英語の授業には向いているのではないかと実感している」という。

小学校段階では、スピーキング活動を軸にしながら、「アルファベットが書ける」、「大文字・小文字を書き分けられる」というライティング技能で求めることも中学校教師から伝えている。文字と音をつなげるフォニックスを入れることで、中学校の学びがスムーズになる点など、小中の接続を意識して伝えている。小中の英語学習をシームレスにつなげることで、「中 1 ギャップ」の段差をなだらかにすることができるのではないかと期待している。



## 技能統合型の言語活動と英語に触れる機会の増加により、 4 技能をバランスよく育成する

### ◎学校プロフィール（※学級数及び生徒数は平成 29 年 1 月調査日時点）

設立・形態	昭和 10（1935）年、高等小学校として設立
学級数・生徒数	12 学級（386 名）／第 3 学年…4 学級（142 人）
ALT 活用状況	非常勤 1 名。月 1、2 回程度、各クラスの授業に入る。
取組の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スピーキングとライティングの技能統合的活動を重視</li> <li>・ライティングの表現力を高める、ポスターなど展示物の作成</li> <li>・授業とリンクさせた「英語の広場」の運営</li> </ul>

### ◎試験結果、質問紙における学校の特徴 ・第 3 学年の平均スコア（点）

	Reading	Listening	Writing	Speaking
F 中学校	89.9	99.3	39.1	10.1
全国平均	83.4 / 170	93.8 / 170	31.3 / 96	6.7 / 14

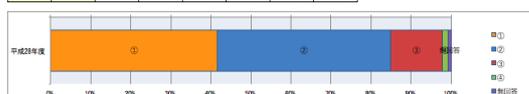
### ・生徒質問用紙結果

No. 15 次の学年の英語の授業では、聞いたり読んだりしたことについて、その内容を英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりしていたと思いますか。

① 第 3 学年

① そう思う ② どちらかといえば、そう思う ③ どちらかといえば、そう思わない ④ そう思わない

実施年度	選択番号	①	②	③	④	無回答	計
平成 29 年度	回答数	55	37	17	2	1	112
	選択率	41.7%	43.2%	12.9%	1.9%	0.8%	100%



<学校の英語の授業について>

最も当てはまるものを 1 つ選んで下さい。

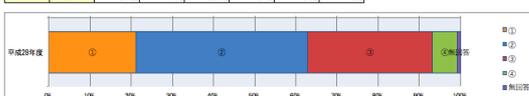
(総合的な活動)

No. 16 次の学年の英語の授業では、英語でスピーチやプレゼンテーションをしていたと思いますか。

① 第 3 学年

① そう思う ② どちらかといえば、そう思う ③ どちらかといえば、そう思わない ④ そう思わない

実施年度	選択番号	①	②	③	④	無回答	計
平成 29 年度	回答数	28	55	40	8	1	132
	選択率	21.2%	41.7%	30.2%	6.1%	0.8%	100%



### ライティングやスピーキングの活動が充実

4 技能すべてにおいて、全国平均を上回った。特に、ライティングとスピーキングにおいて顕著な指導を行っていることが推察される。

「英語を書くことに関する活動」では、「内容を英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりしていたと思いますか」に対して、「そう思う」と回答したのが 41.7% となった（全国平均は、28.9%）。

さらに、「総合的な活動」で「英語でスピーチやプレゼンテーションをしていたと思いますか」という質問の回答が「そう思う」「どちらかというそう思う」と回答した生徒が 62.9%（全国平均は、30.9%）となった。

ライティングとスピーキングの活動が充実していることが推察される。

◎ 調査結果に寄与したと考えられる授業内の取組

1. スピーキングとライティングの技能統合的活動を重視

同校では、教科書の新出基本本文をアレンジして、自分の言葉にし、書かせるという活動を重視している。例えば、図1のような問題を授業中に投げかける。

\*

自分のことについて書いてみよう。さらに、もう1～2文を付け加えよう。

「私にとって～することは楽しい。」

例) It is fun for me to watch TV. I like Sazaesan the best because the story is simple and interesting. I watch it every Sunday.

\*

こうした課題に対して、“It is fun for me to listen to music. I like music. So, I listen to music every day.”や“it is fun for me to play sports. I like baseball the best.”などを書いてくる生徒が見られた。

個人ワークでのライティングを完成させたら、ペアになり、自身で書いたものを基に会話をする。「Please say about your sentences.」などと始め、ライティングした内容を伝え、さらに「Oh, really?」や「How about you?」と会話を広げていく。この対話の中で、スピーキングとリスニング双方の技能を高めていくことができる。会話を一通り終わると、「Please change your handout.」といって、ペアでそれぞれのワークシートを交換する。文法やスペルのチェックを生徒同士お互いに行うのである。生徒同士のアクティブ・ラーニングが促進される上に、「他の生徒に見せるのだから、変なことは書けない!」と教師に提出するよりも緊張感を持って取り組む面があるという。生徒同士で確認後、最終的には教師に提出し、担当教師やALTが細かなチェックを加え、フィードバックする。

会話の流れを習得するだけならば、スピーキング活動だけで足りる。しかし、それだけでは正しい英語を表現する力が定着しないと感じ、まず自分の考えを整理した上で対話的な言語活動へと進め、最後にライティングして振り返るという活動にした。

スピーキングとライティングの技能統合的な活動にすることで、着実に英語力を高めていくことができる。さらに、生徒同士のチェック機能が働き、活動の「やりっぱなし」になっていない点も学力の育成を促している。

図1 授業で使うライティングワークシート

<p><b>P38 Lesson4 GET Part2 The Story Of Sadako</b></p> <p>3年 組 番 氏名 _____</p> <p>★Write 自分のことについて書いてみよう。さらに、もう1～2文を付け加えよう。</p> <p>① 「私にとって～することは楽しい。」</p> <p>例) It is fun for me to watch TV. I like Sazaesan the best because the story is simple and interesting. I watch it every Sunday.</p> <p>_____</p> <p>② 「私にとって～することは大切だ。」</p> <p>例) It is important for me to study English. I want to go to the USA someday. I have to study English very hard.</p> <p>_____</p> <p>Check!.</p>
--

## 2. ライティングの表現力を高める、ポスターなど展示物の作成

同校は、教科センター方式の学校づくりを行っている。教科ごとに教室を割り振り、生徒は授業のたびに、各教科の教室へ移動する。「教師が教室に来るのを生徒が待つ」のではなく、「生徒が各教科の教室に授業を受けに行く」方式だ。そのため、各教室にはクラスの掲示物を展示するのではなく、教科の展示ができる。英語の授業で作成したポスターなどが、学年問わず一つの教室に掲示されているのだ。1年生が3年生の作成した掲示物を見て、レベルの高さを感じたり、新たな英語表現に触れたりすることができる。

こうした環境を活用し、ライティングの表現力を高めるべく F 中学校では、掲示物の作成に力を入れている。1年次の「自己紹介」のテーマに始まり、年に4、5回取り組む。

写真 1、2 では、関係代名詞を学んだ後に「自分で便利グッズを考えて紹介しよう」というテーマで4人ほどのグループでライティングに取り組んだ様子である。この課題に取り組むにあたっては、「主格」と「目的格」を付箋で整理した。例えば、「高齢者が使いやすい」であれば目的格になり、「自由に動く装置」であれば主格になる。生徒は、目的格と主格の違いで混乱しがちである。そこで、長文のライティングに入る前に、文法構造を整理させる活動を入れた。

また、「宣伝文句を入れよう」と伝えているので、生徒たちは「Wow!」「Do you want it?」といったあおり文句を工夫する。「自分で便利グッズを考えて紹介しよう」のテーマでは生徒たちの発表の中には、「Super umbrella」「Exciting pen set」などユニークな提案がされた。

こうして付けたライティング力は、定期テストでも8点～10点ほど英作文の設問を入れて測る。その際には、授業時のプリントのように例文は紹介せず、自分で既習事項を使ってライティングさせている。

写真 1 生徒が展示物を作成する様子

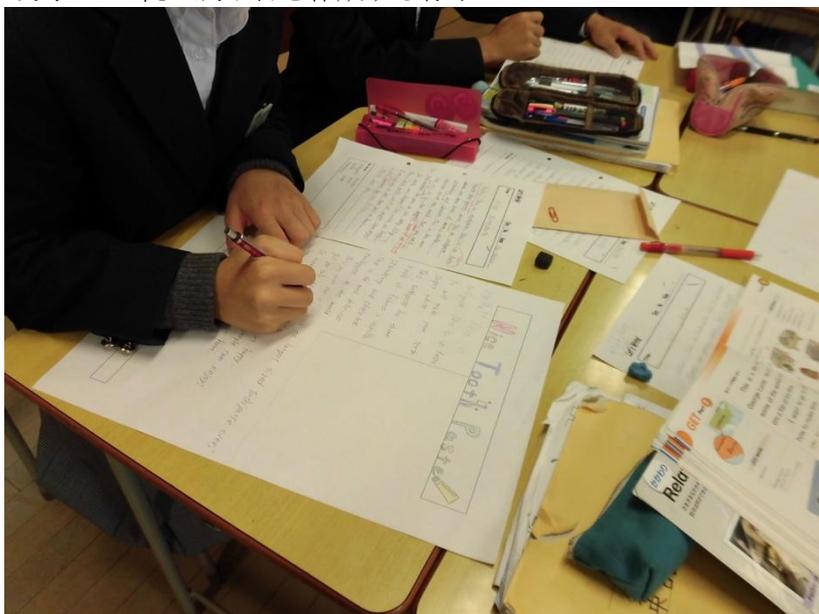
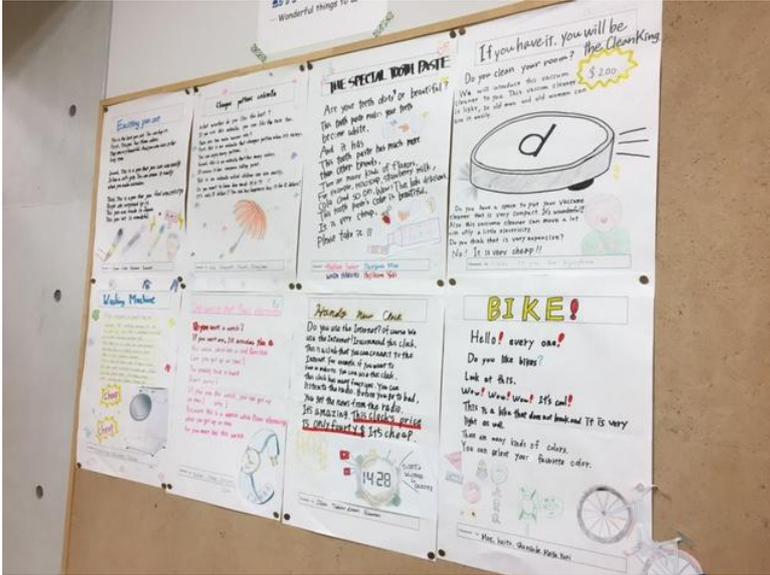


写真 2 生徒が作成した展示物



### 3. 授業とリンクさせた「英語の広場」の運営

同校には、「英語の広場」と呼ばれる、英語のアイテムや展示物が置かれるスペースがある。ハロウィンやクリスマスなどのイベントをする場合には、「英語の広場運営委員」の生徒たちに運営が任せられ飾り付けをする。さらに、1年～3年次の「教科の進度表」と「教科の広場の運営委員の活動」をリンクさせるなどして「英語の広場」を活用する。図2は、活動成果をまとめた。例えば、2年次に行う「For Our Future (地球環境の未来)」の単元に合わせて、「世界遺産」についての展示を行った。また、英語科と社会科のコラボ企画として、それぞれの教科の既習事項をクイズにして出題するといった「イベント企画」もした。

また、中間テスト・期末テストの前には、対策問題のプリントを置く。これは、授業プリントや教科書を基に「英語の広場運営委員」の生徒たちが作成した。作問者側は問題を作ることで学力が定着し、さらに、解く側も生徒が出した問題だから頑張る気持ちが芽生えるというよい循環が生まれている。「英語の広場」には、生徒からの問題だけでなく教師が作成したプリント問題も置かれている。「英語科からの挑戦状！」と大きく掲示したり、3年生向けに高校入試対策問題として「学習問題全国制覇プリント」を置いたりしているのだ。

なお、ALT が来校している時には、休み時間に「広場」で英語のゲームをしたり、クイズが出されたり、「英語を使う場」としても活用されている。こうした「英語の広場」の活用により、生徒の英語に対する抵抗感がなくなっている。

図 2 「英語の広場」活用実績

(H28 英語の広場運営委員 1年 10名・2年 6名・3年 7名 合計 23名)

月	教科の広場等の写真	教科の進度表			教科の広場の運営委員の活動
		1年生	2年生	3年生	
4月	↓世界時計 What time is it? を更新	授業ガイダンス			
5月	ふれあい・決意 英語の広場に向かう階段	L1 I am Tanaka Kumi (あいさつ) ⑧	L1 Aloha! (ハワイの伝統文化) ⑮	L1 My Favorite words (ことばの持つ力) ⑬	
	英語の広場に向かう階段	L2 My School (人やもの) ⑧	L2 A Calendar of the Earth (地球の歴史) ⑮	L2 Finland —Living with Forests (異なる自然 異なる文化) ⑮	広場の運営委員の募集・組織づくり
6月	新聞記事の紹介	L3 I like Kendama (好きなこと) ⑭	L3 For Our Future (地球環境の未来) ⑮	L3 Rakugo Goes Overseas (日本の伝統文化の発信) ⑮	前期中間テスト対策問題
7月	努力・熱中 世界を学び「世界遺産」	L4 Field Trip (校外学習) ⑭	L4 Field Trip (校外学習) ⑮	L4 The story of sadako (広島原爆) ⑮	第1回広場の委員会・活動方針とアイデア交換
	世界を学び「世界遺産」	L5 Our New Friend from India (クラスメート) ⑭	L4 Enjoy Sushi (日本の各地域の食文化) ⑮	L5 Houses and Lives (世界の家と生活文化) ⑮	企画展示づくり(七夕に願いを)
8月	七夕(願い)	L6 My Family in the UK (イギリスの文化) ⑮	L5 Let's Read A Pot of Poison ⑩	L6 Let's Read 1 Learning from Nature ⑥	前期期末テスト対策問題
9月	挑戦・向上 学習意欲を高める工夫	L7 Wheelchair Basketball (いろいろなスポーツ) ⑭	L6 Let's Read Uluru (旅と地域の文化) ⑮	L7 We Can Change Our World (創意工夫と社会貢献) ⑬	English Lunch Break Chat(モーガン先生との会話)の企画
	学習意欲を高める工夫	L8 School Life in the USA (外国の中学校生活) ⑭	L7 good presentations (さまざまな視覚表現) ⑮	L8 I Have a Dream (アメリカの公民権運動) ⑮	East Festival (社会科とのコラボ) 世界に関わるクイズ
10月	East Festival(Quiz) (社会科とのコラボ)	L9 Four Seasons in Japan (日本の身近な年中行事) ⑮	L8 India, My country (多言語の国 インド) ⑮	L9 Let's Read 2 A Moment of Peace ⑥	企画展示づくり(ハロウィーン)
11月	感動・貢献 学習意欲を高める工夫	L8 School Life in the USA (外国の中学校生活) ⑭	L7 good presentations (さまざまな視覚表現) ⑮	L8 English for Me (英語を学ぶことの意義) ⑮	後期中間テスト対策問題
	学習意欲を高める工夫	L9 Let's Read 2 A Girl Saved Many Lives ⑧	L8 Landmines and Aki Ra ⑩	L9 Let's Read 2 A Moment of Peace ⑥	企画展示づくり(クリスマス)
12月	企画展示:メリークリスマス 企画展示:ハロウィーン	L8 School Life in the USA (外国の中学校生活) ⑭	L7 good presentations (さまざまな視覚表現) ⑮	L8 English for Me (英語を学ぶことの意義) ⑮	入試問題全国制覇プリント
1月	Our Wishes in 2016(絵馬)	L9 Let's Read 2 A Girl Saved Many Lives ⑧	L8 Landmines and Aki Ra ⑩	L9 Let's Read 2 A Moment of Peace ⑥	後期期末テスト対策問題
2月	夢づくり・継承	L9 Four Seasons in Japan (日本の身近な年中行事) ⑮	L8 India, My country (多言語の国 インド) ⑮	L9 Let's Read 2 A Moment of Peace ⑥	第2回広場の委員会・広場の活動の振り返りと来年度への引き継ぎ
3月	2年生: Good Presentation	L8 School Life in the USA (外国の中学校生活) ⑭	L7 good presentations (さまざまな視覚表現) ⑮	L8 English for Me (英語を学ぶことの意義) ⑮	

◎ 授業以外の取組

プロの演出家を呼び、有志で英語劇を実施

今年度は、「英語の広場」運営委員の生徒と英語科の教員たちで、英語劇をした。プロの演出家を呼び、体育館で即興的に実践している。練習を積んで行うものではなく、その場でセリフや振り付けを覚えていった。

題材は、『浦島太郎』だが、多様なダンスが入ったり、コミカルな動きが加わったりと観ている人が飽きない内容となっている。事前に保護者へプリントで告知をし、さらに校内放送で生徒や教師の観客を募った。これにより、開催した体育館は多くの観客で賑わった。

ここでは、「間違っても思いっきり英語で表現しよう」「体を動かしながら英語を話そう」などと生徒に伝え、英語を実践的に使う活動を経験する機会となった。

写真3 有志の生徒の英語劇



